仮面の肖像。

仮面をモチーフにした作品集。本文のタイトルや文中に、仮面の肖像・ラビリンスという言葉が出てくるが、それはこの写真を発表した際の、氏の作品展のタイトルである。氏は韓国の芸術家集団と交流をもち、日本のアーティストと協同で作品展を開催する計画がある。それまでの間にいくつかの個展を開く予定だが、興味のある方はぜひ一度、実物を鑑賞することをおすすめする。

ARTIST OF PHOTOGRAHY

中村 趙

【KYO NAKAMURA】

人は仮面をつけることで素顔を隠す。だが、同時に今まで気付くことのなかった、心の奥に潜む真実を露呈するのではないでしょうか？

仮面。

それは、日常的現実の中で抑圧され、閉じこめられた心の混沌や非理性的感情を引き出す道具である。

さらに。

仮面こそが、潜在的にあるいは本質的に人の顔そのものである、と云えるのではないのだろうか？

中村氏は、今、そんなことを考えている。写真という表現と関わりはじめて二十五年。今、氏は仮面をモチーフに作品づくりをつづけている。

昭和四十四年に同志社大学を中退。東京にいた頃は、"食べるための写真"を撮りつづけていた。兄がカメラ好きだったので子どものときからカメラや写真雑誌には親しんでいた。だが最初からフォトグラファーになろうと思っていたわけではない。

大学時代はずっと音楽活動をつづけていた。東京に出たのもバンド活動をするためだった。しかし、それでは食べていけない。写真学校に通った後、写真の仕事をこなしたのも音楽のためだった。

限界を感じたのは昭和五十二年頃。本人いわく、"ほとんど死んだような状態で"京都に帰ってきた。音楽は失ったが、表現への意欲は失われていなかった。ふと、今までとは違う気持でふたたびカメラを手にした。心の奥底で熾火のように眠っていた感性が、そのとき燃えあがるのを感じた。

しばらくはオブジェと同じ感覚で、女性ヌードを撮りつづけた。ひたすらフォルムの美しさだけを追い求めた。やがていくつかの作品を発表。もっと人間の内面を表現したくなっている自分に気付いた。好きだった十九世紀の文学や美術と、仮面という概念が、そのとき頭の中で或るかたちになりはじめていた。

そして。

現在の作品づくりをはじめて八年。当初は仮面によって女性の内面を抽出することだけが目的だったが、近頃はストーリー性を帯びた写真も多くなっている。それにつれて"描写"へのより強い手応えも感じられるようになった。

このテーマで撮影をはじめてから、中村氏は、或る女性デザイナーの協力を得ている。彼女は氏のイメージどおりの仮面を制作、写真の中ではモデルもつとめる。抽象的な要素の強い作業だけに、イメージの共有はかなり難しいのではないかと質問したが、

「実際、議論をとおり越して口論になることもありますよ。でも、今まで失敗したことはないな」

と、静かに語るのみである。切れ長で怜悧にひかる瞳は余裕を漂わせていた。自分ひとりさえもてあます身には、氏のそうした創作スタイルは羨ましいかぎりである。

直接お会いする前に、ポストカードとして印刷された氏の作品を数点拝見していた。その作風から、もしかしてマッキントッシュ(グラフィックデザインなどに使用するパーソナルコンピュータ。フォトショップなどのソフトを使用、撮影した写真をスキャナーで画像データとして取込み、グラフィック処理をする写真家も多い)を使用しているのではないかと思った。

だが、

「機械は使っていません。いや、使うまい、としているのが正直なところかな。やはり手作業でプリントした方が納得できますね。少なくとも僕の撮影する写真では、厚みというか、量感・質感が機械では出ないんです」

氏の写真には、一九二〇年代のフレンチポストカードによく似た構図のものも多い。時代を経た油絵に見られる皺割れや古色が多重露光によって表現されており、全体としてさらに絵画に近いものとなっている。裸体そのものの質感や光の表現から、筆者はジャン・アングルの絵を想像したが、

「いやあ、特に意識している画家、これというものはありません。まあ、十九世紀の美術全般に興味はありますけれどね」

と、あくまでクールな回答である。

取材も終わる頃、オリジナルのプリントを、ぜひ、と希望して見せていただいた。バライタの印画紙にセピア調で仕上げられたそれは、凄味を感じるほど美しい。やはり印刷では表現できない世界である。

幻想的な仮面を身につけた裸体が、徹底的に加工されたシチュエーションの中で静止する。そして硝子と云うより水晶を連想させる硬質な雰囲気の中で、こちらを見る瞳だけがどれも"生"のままである。違和感すら覚えそうなこの瞳が、しかし、写真の集中力を一気に高めている。この不思議な感覚がイコール、内的世界の表現なのだろうか。仮面の肖像から、氏のつくりあげるラビリンスへ通じる扉が、この瞳の中にあるようだ。

氏は、カラー写真を撮らない。今日まで自分の作品として表現したものはすべてモノクロである。色はそれ自体が主張をもつし、色で主張しなければならないものは何もないからだ。

PROFILE

京都出身。昭和二十四年生まれ。同志社大学を中退後東京の写真学校を経て"食べるための"写真を撮りはじめる。大学在学中より音楽活動をつづけていたが、昭和五十二年に活動を中止。仲間はバンド活動をつづけるが、本人は京都へ帰京後、作品としての写真活動に入る。数々の個展を開き、公募展などにも入賞。仮面をモチーフに、人間の内面を表現した作品で現在注目を浴びている。